

〔江戸時代後期の絵画展によせて〕

## 館蔵品を中心とする江戸時代後期の風景画について

江戸後期の画壇の業績の一つに、実写的風景画の開拓があります。もちろん、日本風景はすでに平安時代にやまと絵の名所図屏風として描かれ、その後も社寺縁起絵などの絵巻物の背景に取り上げられました。また、鎌倉時代以後の社寺曼荼羅には、ときどき写実的な風景が現われます。そして、室町時代から近世にかけての水墨画ややまと絵には、日本の実景が題材として選ばれていることがあります。

しかし、一定の視点に基づいて、特定の場所を正確に捉えた風景画が描かれ、しかもそれが芸術作品として鑑賞されるようになるのは、江戸中期以後と考えられます。この方面の業績はまず南画の真景図に現われ、池大雅筆『浅間山真景図』（1760年ごろ、兵庫個人蔵）と丹羽嘉言筆『神州奇観図』（1770年ごろ、名古屋博物館蔵）などが描かれました。特に『浅間山真景図』には、早くも西洋銅版画の影響が現われています。また、大雅の弟子桑山玉洲の画論『絵事鄙言』（1799）はよい山水画を描くために、実景研究の必要性を説いています。

一方1759年ごろ、青年時代の円山応挙は中国の蘇州版画を通じて西洋の透視遠近法を摂取し、眼鏡

絵を制作しました。その特徴は中国風景を写すばかりでなく、京都名所などを取りあげたことにあります。また、彼は粉本（絵手本）を写す画業を排し、写生に基づく絵画制作を唱えました。

しかし、円熟期の応挙は意外なほど保守的です。つまり、彼は個々の対象は写生に基づいても、それを組合せて大画面を作る構成の原理は、過去の障屏画などの伝統に従うことが多かったのです。また、中年以後は余り特定の場所の風景表現をおこないませんでしたし、たとえおこなっても視点の不明瞭なものに見方に基づいています。

もちろん、『東山三絶図』（1786年、当館蔵）などは、気楽な即興画だけに、応挙が青年期に研究した透視画法の効果が生かされているまれな一例です。しかし、有名な『淀川兩岸図巻』（1765年、アルカンシエール美術財団蔵）は、風景の細部を綿密に描いていても、元來視点の移動する図巻であり、また兩岸の風景をそれぞれ対岸から眺めたものをたがいに対応させ、横に続けて一画面に表わすという多重視点を示しています。そこで、このすぐれた図巻も近代的な視点の統一を示すものでなく、伝統的



駿河湾富士遠望図 垂欧堂田善筆

な絵図面のようなものと見なされます。

また、『四季山水図屏風』（6曲2双、1787年、当館蔵）は、部分的には応挙の透視遠近法研究の跡を示していますが、全体の構成は東洋の平遠法によっています。そして、応挙は実景研究のため京都から遠い旅行をしたことがなく、彼の庇護者である駿河原の宿の植松与右衛門から、しばしば富士を見にくるよう招待されても、ついに行きませんでした。

そこで、応挙は一般に写生派の代表とされていても、風景表現において新味を出した画家とは認められません。結局、応挙の芸術は伝統文化の都市京都に生まれたもので、そこには革新性と保守性の妥協がありました。

これに対して、江戸後期には新興都市の江戸を中心として洋風画が勃興しました。この洋風画は桃山時代のそれとはちがって、西洋原画の模写と構成に終始せず、東洋的なないし日本の題材を開拓したことに特色があります。その最初に登場したのは秋田蘭画でしたが、結局それは江戸系の洋風画でした。秋田蘭画の中心画家小田野直武は、



神奈川風景図 谷文晁筆

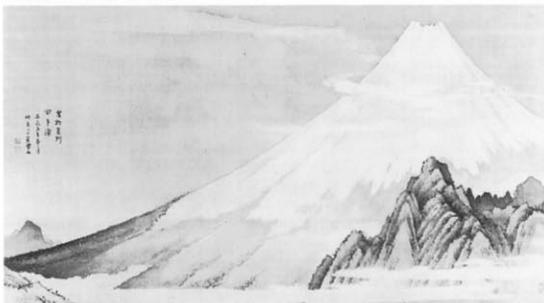
初め東洋の花鳥画に西洋画の視点を導入した作品を描きましたが、その短い生涯の晩期には、西洋銅版画に学んだ日本風景図に進みました。直武筆眼鏡絵『江の島図』（当館蔵）はその一例です。

ついで、直武の教えを受けた司馬江漢は、油絵や銅版画を制作しましたが、その作品は西洋画の模写よりも、日本風景に重要性があります。油絵『七里ヶ浜図』（当館蔵）は江漢の代表作の一つですし、また南画家の谷文晁の『神奈川風景図』（1802年、当館蔵）は多分江漢の風景画の影響を受けているのでしょうか。洋風画の風景表現は、江漢を受けついで『駿河湾富士遠望図』（当館蔵）のような作品を描いた垂欧堂田善、さらには安田雷洲に及んでいます。

江戸後期の西洋画法による日本風景図の特色は、何よりも透視遠近法と陰影法に基づき、実景をできるだけ正確に描写し、しかもそれを鑑賞絵画に高めたことにあります。また、江漢の油絵に見られるように、青い空、白い雲、青い海というこれまで余り認められなかった表現を開拓したことも注目されます。この新表現により、江戸の洋風画は同じ江戸の地に生まれた幕末の葛飾北斎や歌川広重らの風景版画に、強い刺戟を与えました。また、洋風画や浮世絵の風景版画は、新興都市江戸に展開したもののだけに、京都の応挙のように伝統の重さをにやむことがありませんでした。浮世絵の風景版画は西洋近代絵画に刺戟を与えましたが、それは一つには西洋に学んだ洋風画に負うところが多かっただけに、西洋の画家にとって受容しやすい面もあったのでしょうか。

(成瀬不二雄)

富嶽図 宋紫石筆



江の島図 小田野直武筆

